

特集

「こころ一つ」に

牛窓花火あげ隊たい

8月5日、牛窓の夏の風物詩ともいえる『牛窓花火大会』が、行われま

した。夜空を彩る大輪の花火。その花火に魅了される大勢の人たち。

2,000発の美しい花火が上がるまでには、多くの人たちの汗が流れています。

牛窓花火大会の成功に向けて、心一つにして尽力した『平窓花火あげ隊』の奮闘ぶりを紹介します。



中学生が書いたのぼり旗が、毎年活躍してくれます



みんなで楽しみたいと語る花火あげ隊隊長の柴田健志さん



無償で提供されているSEC跡地で駐車場の整理をするボランティア



募金をよろしくお願ひします



大会まで何回も行われる会議では、熱心に意見が交わされます



牛窓中学校吹奏楽部のプラスバンド演奏

住民パワーさく裂

しかし、「今までずっと行われてきた花火大会を中止にするのは、忍びない」「伝統の火を消さないようにしよう」と、商店主や住民有志が集まり、『牛窓花火あげ隊』を結成。

翌年の平成12年、牛窓花火あげ隊が、企業や商店、住民の皆さんへ寄付を募り、募金560万円を集め、町からの補助金なしで、例年と同じ規模の大会を実現しました。

大成功に終わった平成12年の花火大会ですが、毎年、ボランティアだけで行うのは、大変なことでした。

平成13年に、町のイベントを考える牛窓町イベント実行委員会が立ち上がり、行政・商工会・観光協会が主にイベントのあり方を協議。住民と行政、商工会、観光協会の協力で、花火大会を行うことや補助金が復活することになりました。

いお祭りとして、みんなに親しまれていました。この日を見がけ、県外からもたくさんのお客が訪れ、祭りを楽しんでいました。そして、平成9年に、舞台を現在の県営棧橋に移し、趣向を変え、花火大会は、牛窓の夏の風物詩として、みんなに愛され続けました。

花火大会の存続の危機 伝統の火が消える？

ところが、平成11年のこと。財源の確保の問題、スタッフ不足、その他いろいろな課題が持ち上がり、花火大会自体が存続の危機に陥りました。

住民参画型にはならないか、続けていける体制づくりが必要なのではないか。それまでずっと主催をしてきた牛窓町商工会も、今までのような体制の花火大会は、継続できないとの方向を打ち出しました。

きたきたきた 花火の季節 牛窓の愛



●特集 こころ一つに

昔は牛窓港祭りとして親しまれる

牛窓花火大会は、昭和40年から始まり、開始当時は牛窓港まつりとして大勢の人でにぎわいをみせていました。現在のエーゲ館うしまど西側辺りに、大きな舞台が設営され、のど自慢大会も行われ、花火に花を添えていました。

港まつりは、牛窓町商工会の主催で、主に企業・商店の寄付や町からの補助金を財源とし、開催されてきました。

毎年、大勢の人でにぎわい、夏にはなくてはならない、夏にはなくてはならない